

長く厳しい冬が続き、暖かな陽射しと緑の息吹を心待ちにするこの浜頓別の地に、一足早く春が訪れ、大きな可能性を秘めた若者たちが旅立つ佳き日を迎えることができました。

本日ここに、北海道浜頓別高等学校第七十回卒業証書授与式を挙行するに当たり、本校の教育活動に多大なるご支援をいただいております浜頓別町長 南尚敏様、保護者と教職員の会会長 村田克明様をはじめとして、多くのご来賓のご臨席と保護者の皆様のご列席を賜り、厚くお礼申し上げます。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。三年間、時に喜び、時に心配しながら、温かく見守ってこられたことと思います。これまでのご労苦に敬意を表するとともに、本校の教育活動へのご理解とご協力に対し、高い壇上からではあります但し感謝を申し上げます。

卒業生の皆さん、君たちをはじめとする、この春卒業を迎える全国の高校生は、これまでの高校生活のほとんどが「非日常」という高校生活でありました。我慢、我慢の連続にも関わらず、毎日元気に登校してくれてありがとう。本当に、卒業おめでとう。

饒に漢詩を引きながらお話しします。唐代の詩人 于武陵の詩「酒を勧む」です。

勸 君 金 屈 卮 君に勧む 金屈卮
満 酌 不 須 辞 満酌 辞するを須るず
花 発 多 風 雨 花発ば 風雨多し
人 生 足 別 離 人生 別離足る

作家 井伏鱒二はこの詩をこう解釈しました。

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ

五七のリズムが快く、酒を酌み交わしながら別れを惜しむ場面が目に見えようです。

ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

せつかく咲き誇った花でも嵐の前では散ってしまうこともあるのだぞ、とちよつと戒めるような語り口です。「ハナニアラシ」とは、高校での新たな生活を心待ちにしながらも、コロナ禍の前に次々と楽しみが奪われていった三年前の状況に重なります。今も昔も人生は必ずしも順風満帆とはいかないということです。

そして名訳とされる『サヨナラ』ダケガ人生ダ」。人生に別れはつきものですが、井伏はなぜ「サヨナラ」ダケと言うのでしょうか。

「サヨナラ」とは、「そういうことなら、これにてご免」という言い方の「そういうことなら」を指す「左様なら」の部分が別れの挨拶になったとされています。そう考えると、「サヨナラ」という言葉自体に別れを受け入れる潔さや覚悟のようなものを感じます。四月に着任した際に、人の一生には誕生、成人、結婚、死亡といった節目があり、高校に入学するのもその一つであるという「通過儀礼」の話をしました。節目のたびに出会いや別れがあり、人は別れを経験するたびに強くなり、区切りをつけて次の段階へ進めるのです。

そして、『サヨナラ』ダケガ人生ダ」に込められているのは、別れの寂しさだけではなく、別れが必ずあるのなら、最初で最後かもしれないこの瞬間を大切にしなければならぬという、一期一会の思想でもあります。

皆さんが入学した三年前、コロナウイルスを前にして、人間は交流を断つことでしか対応できませんでした。しかし、そんな状況を打開しようと人々は知恵と力を出し合い、リモートという手段で交流する可能性を生み出しました。技術の進歩は、離れていても映像と音声で人とのふれ合いを可能にしましたが、同時に人と人が直接会ってこそ伝わる感情や感覚というものの大切さを改めて感じることもありました。

SNSなどで簡単に物事が処理できる時代ですが、一会の表す「たった一度の出会い」の意義とは何かを是非考えてみて欲しいと思います。

「そんな時代もあったねと つか話せる日が来るわ」こう言える時期がそう遠くはないと信じたと思います。我慢を強いられる辛い三年間、しないで済ませられるならしくてもよい体験だったかもしれないませんが、その時期を精一杯生きてきた人にか得られない、代え難い体験でもあります。今日この学び舎を旅立つ皆さんが、この「別れ」をまた一つ成長の糧として健康で活躍することを祈るとともに、三年間の努力に大きな拍手を送り、万感の思いを込めて式辞といたします。

令和五年三月一日

北海道浜頓別高等学校長 三井智和